

第56回 古代史を解明する会

「 誤った古代史の常識を正す 」

(I)

2026年8月8日

丸地三郎

誤った常識が、古代史の解明を妨げている。

- 「古代史」は、歴史の中で、難しい分野です。
 - 理由は、歴史家達が得意でない科学の重みが大い時代だからです。
 - 歴史を構築する歴史家達は、主に文献を根拠に歴史を研究し、記述します。
 - 歴史の中で科学は重要ですが、科学者の文献に記した史料を歴史家は扱います。
 - 科学を正しく評価する作業を行うことは有りません。
 - 従って、科学の重みは、小さくなります。 科学を取り扱った文献は、要注意です。
 - 残された文献の少ない古代史の世界では、歴史家が科学に直接対面します。
 - 貝塚を解明するためには、氷河期の海面の上下が問題となります。
 - 地球科学の見識が必須です。
 - 氷河期の海面高さ・気温・地球の変形など、科学の最新調査結果が必須。
 - 年代を知るには、地球科学による年代測定が基準になります。
 - 年代特定には、科学的方法が必須。
 - 年輪年代法は、信頼性が破綻。
 - 基礎データの公開を拒否。開示裁判結果に対して、虚偽データを公開。
 - 基礎データを公開し、他者が検証できることが、科学のルールです。
 - 炭素14年代測定法
 - 測定物によって、年代が変動する現象があり、取り扱いは注意が必須。
 - 弥生時代開始時については、取り扱い注意の土器付着物を調査し、問題。
 - 遺伝子・DNAなどは、民族・人種の移動の鍵を握る
 - 進化の激しい学問領域。
 - 旧来の誤ったり理論・結果が現代に残っている。
 - 古代史を研究する人は、科学者の発言・発表を、正確に理解し、注意深く取り扱う必要がある。

誤った情報の影響

- 間違った情報に基づいて構築(検証)された説は、間違えて歴史となる。
- AIの時代に、古代史は恩恵お受け取ることが、余り、出来ない。
 - AIは多くの情報を積み重ね、その情報の累積を基に、回答案・提案を行う。
 - 間違った情報を基に生成された回答・提案は間違い。
 - 多種多様な邪馬台国論の累積をベースにAIが作る回答に、正解の期待は持てない。
- 基礎情報から誤った情報を排除しなければ、AIも使えない。
- 歴史家の仕事も同様と考える。

- [誤った古代常識を正す]

1. 日本人三重構造モデル(3系統説)(縄文人・弥生人・古墳時代人)
2. 沖縄の旧人は死に絶えた論(高宮廣衛/高宮広土の唱えた理論)
3. 鬼界カルデラ巨大噴火 vs 始良カルデラ巨大噴火
4. 日本の古代人口論
5. 弥生式土器は朝鮮半島より渡来 実際に調査した結果弥生式土器は九州から朝鮮半島へ移動
6. 起源となる日本人は、北方より渡来した！
7. 日本人は、朝鮮半島から渡来した！
8. 邪馬台国論は、魏志倭人伝の旅程を論拠としている。
9. 日本神話(古事記・日本書紀の神話部分)歴史として取り扱わないことになっている。
10. 中国史書の取り扱い

- [新発見の事実]

1. ① 中国で古代から貨幣として使用された宝貝の産地は沖縄であった
2. ② 小豆は日本で生まれたもので、アジアに拡散

1. 日本人三重構造モデル(3系統説)(縄文人・弥生人・古墳時代人)

- 従来の「縄文人と弥生人」の二重構造説を修正し、現代の日本人は縄文人系、北東アジア系(弥生人)、東アジア系(古墳人)の3つの祖先系統が混血して形成されたとする最新の遺伝学モデル
- 金沢大学の覚張隆史助教や中込滋樹客員研究員外が提唱。
 - 2021年9月21日発表
 - 遺跡から出土した人骨のゲノム解析から
 - 「現代日本人は大陸から渡ってきた3つの集団を祖先に持つ」と発表
 - 「三重構造モデル」を提唱している。
 - 縄文人/弥生人/古墳人
- 理化学研究所(理研)生命医科学研究センター ゲノム解析応用研究チーム
 - 2024年4月18日発表
 - 「3つの祖先系統」説を発表
 - 全国7地域から集めた3,256人分のゲノム情報を解析
 - 祖先は「縄文系」「関西系」「東北系」の3つに
- ヤポネシアゲノムを提唱する齊藤成也氏は、三重構造説を積極的に推進
 - 科研費用約1億円を使ったプロジェクト
 - ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明
 - 内なる二重構造を展開し、日本人三重構造説を推進
- 最新技術と言われるDNA関連の学者がこぞって、日本人三重構造モデルを推進中。

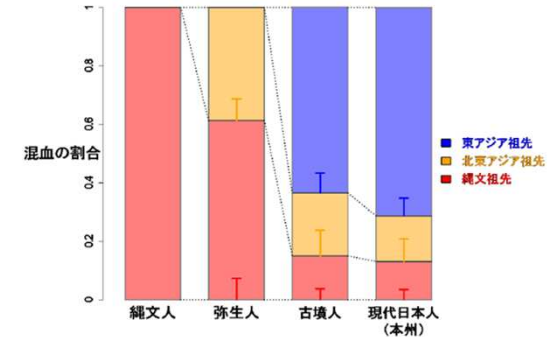


図3. 縄文時代から現代に至るまでの日本人ゲノムの変遷 縄文人は独自の祖先成分をも



3

記者会見 2018年9月10日(日) 16:00~17:00

＜領域代表＞ 斎藤 成也

国立遺伝学研究所 教授

総合研究大学院大学・生命科学研究科・遺伝学専攻 教授（兼任）

東京大学・大学院理学系研究科・生物科学専攻 教授（兼任）

日本学術会議 連携会員（兼任）

ヤポネシアとは？

日本 島々

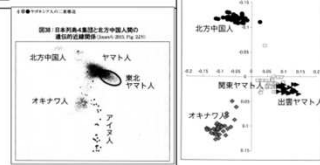
「日本列島」を意味する

島尾敏雄 (1917-1986)が1960年代に提唱

「日本人の三重構造モデル」は、明確な、

8

- ・ 斎藤成也著「日本人の源流」2017年河出書房
 - ・ 東京いずもふるさと会の申し出で、出雲人のDNAを調査
 - ・ その結果、想定外の結果が出た(右図)。
 - ・ より多くの出雲人のDNAを調査。
 - ・ その結果が左下の図。



5 章 ● セマト人のうちなる二重魂

図49: Admixtureで解析した結果(ジナムら, 未発表より)

[illegible]

5章●ヤマト人のうちなる二重構造

図47：出雲ヤマト人45名を含む6集団の主成分分析の結果
(ジナムら、未発表より)

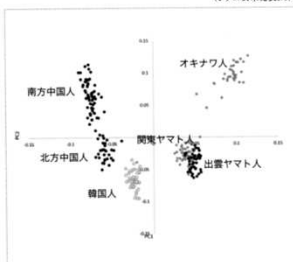


図48：日本列島中央部の中央軸と周辺部分



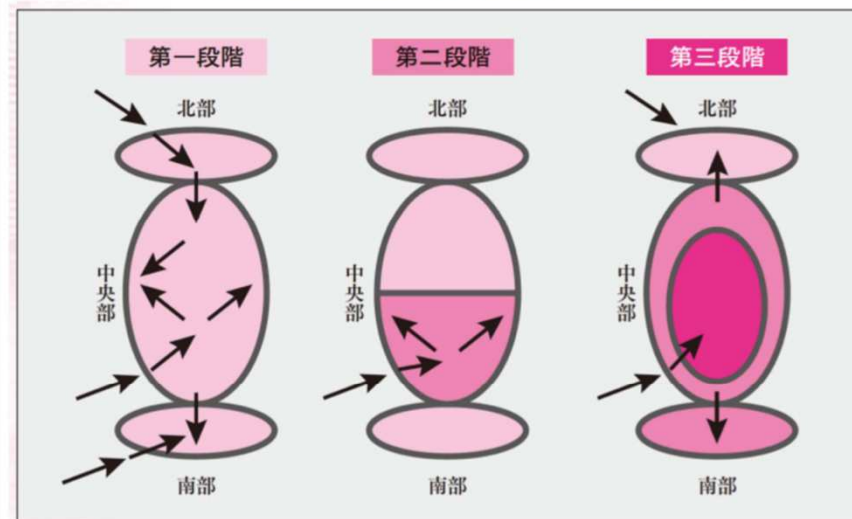
2

- ・研究領域 ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明
- ・研究機関 国立遺伝学研究所
- ・研究代表者 斎藤 成也 国立遺伝学研究所, ゲノム・進化研究系, 特任教授 (30192587)
- ・研究分担者
 - ・ 藤田 慎一郎 国立歴史民俗博物館, 大学共同利用機関等の部局等, 教授 (30190010)
 - ・ 木部 暢子 国立国語研究所, 言語変異研究領域, 教授 (30192016)
 - ・ 篠田 謙一 独立行政法人国立科学博物館, その他部局等, 研究調整役 (30131923)
 - ・ 遠藤 光暁 青山学院大学, 経済学部, 教授 (30176804)
 - ・ 鈴木 仁 北海道大学, 地球環境科学研究院, 教授 (40179239)
 - ・ 長田 直樹 北海道大学, 情報科学研究科, 准教授 (70416270)
- ・研究期間 (年度) 2018-06-29 - 2023-03-31
- ・配分額 *注記
 - ・ 98,280千円 (直接経費: 75,600千円、間接経費: 22,680千円)
 - ・ 2022年度: 19,240千円 (直接経費: 14,800千円、間接経費: 4,440千円)
 - ・ 2021年度: 19,240千円 (直接経費: 14,800千円、間接経費: 4,440千円)
 - ・ 2020年度: 19,240千円 (直接経費: 14,800千円、間接経費: 4,440千円)
 - ・ 2019年度: 19,240千円 (直接経費: 14,800千円、間接経費: 4,440千円)
 - ・ 2018年度: 21,320千円 (直接経費: 16,400千円、間接経費: 4,920千円)
- ・キーワード
 - ・ ヤポネシア人 / ゲノム / 文理融合研究 / 人類学 / ヤポネシア / 現代人ゲノム / 古代人ゲノム / 考古学 / 言語学

9

日本列島への三段階渡来モデル
斎藤成也(2015)『日本列島人の歴史』より

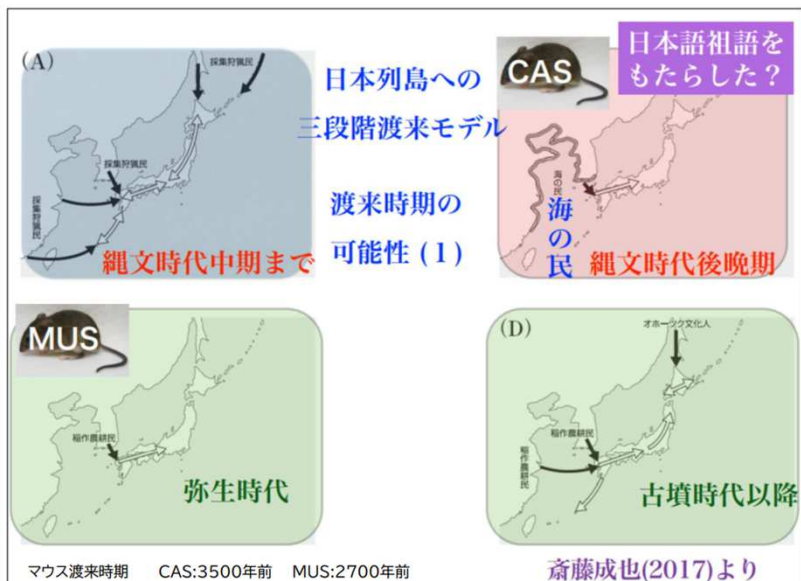
斎藤成也(2015)『日本列島人の歴史』より



ヤポネシアゲノムの三重構造説への関与

10

三段階モデル可能性(1)



11

三段階モデル可能性(1)



16

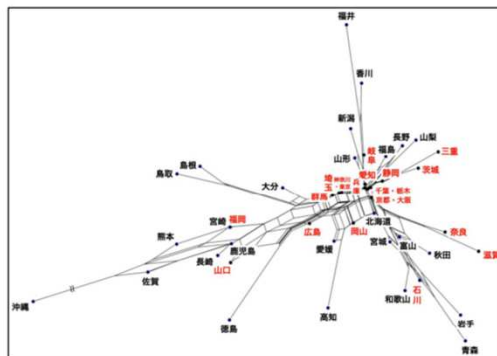
ヤポネシア人の内なる二重構造モデルにもとづく現代人のDNA解析

■ 研究の詳細

● 研究成果

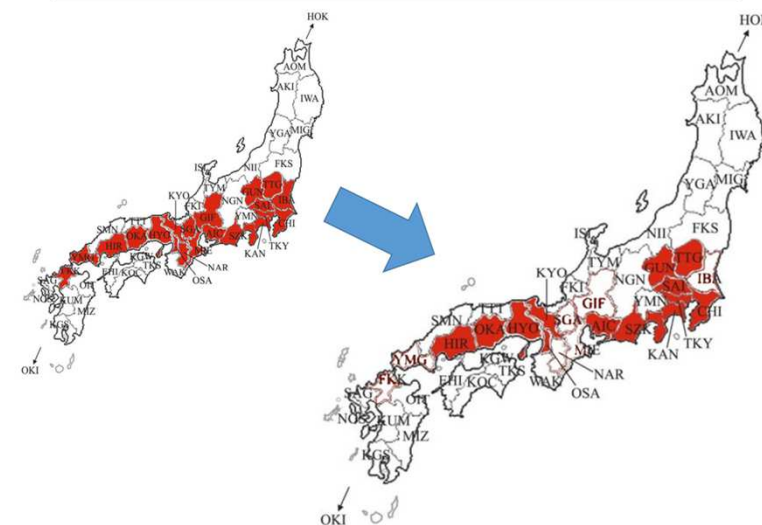
原著論文1:

3種類のデータセット(1642人の日本人のミトコンドリアDNAゲノム配列データ、ジェネシスヘルスケア社から提供を受けた47都道府県総計6万人のミトコンドリアDNAハプロタイプ⁽⁴⁾頻度データ、およびヤポネシアとその周辺6集団(アイヌ人、オキナワ人、ヤマト人⁽⁵⁾、韓国人、北方中国人、南方中国人)の19万カ所のゲノム規模SNPデータを解析した結果、どの結果も「うなる二重構造⁽⁶⁾」モデルを支持していました。



27

内なる二重構造論 県別地図をDNA解析通りに修正



- 利益・効用を受ける古代史の説
 - 日本人の起源の多様性を訴える論
 - 韓国の王朝から日本人の主要な祖先は到来した
 - 天皇系は、朝鮮半島から渡来した。
 - 大和朝廷の主要な一族は、韓国の古代王朝から渡来した。

問題点は、このポイント！

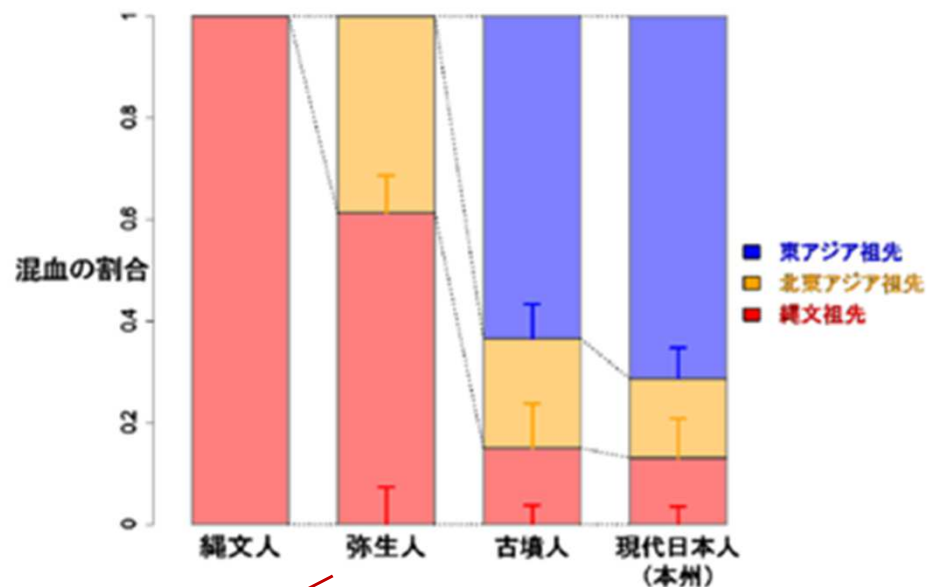
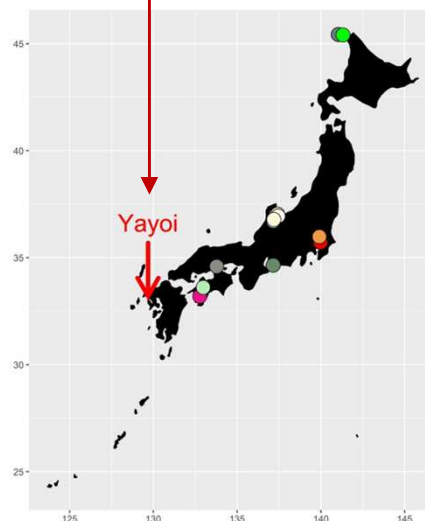


図3. 縄文時代から現代に至るまでの日本人ゲノムの変遷 縄文人は独自の祖先成分をも



図1 弥生時代の九州・山口地域の遺跡
内藤 (1981, 1984) を改変して引用。



- ・ ここで弥生人として扱われたデータの持ち主は、果たして弥生人だったのか？
- ・ 長崎県の下本山遺跡出土の人骨は、どんな人骨だったのか？
- ・ それは、弥生人として取り上げてよいものなのか？

下本山岩陰遺跡の弥生時代人

縄文系

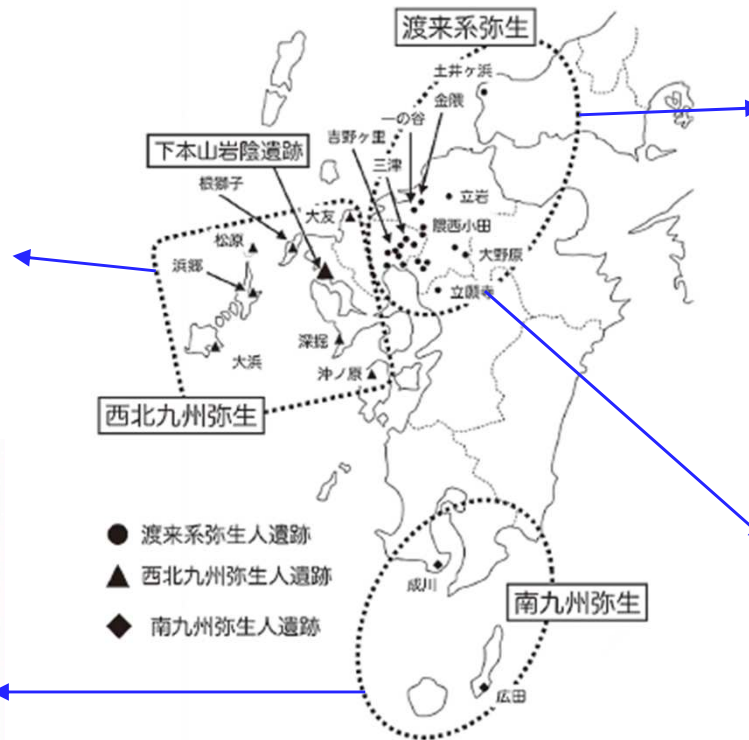
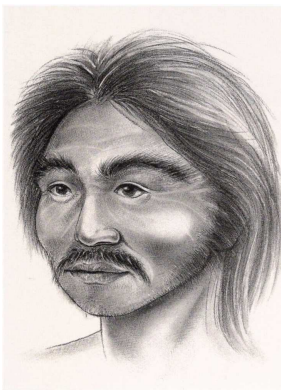
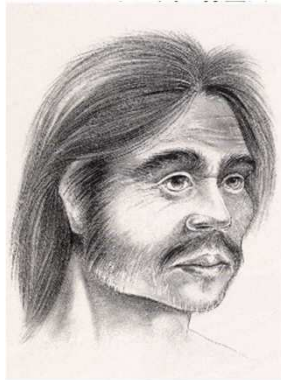
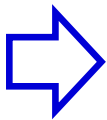
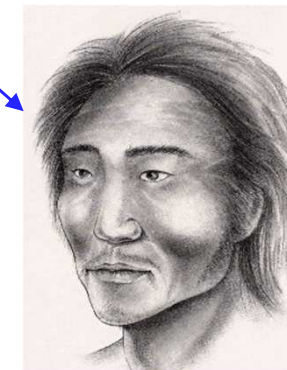
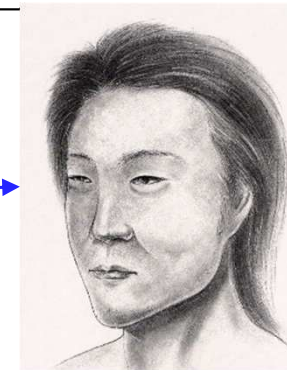


図1 弥生時代の九州・山口地域の遺跡
内藤 (1981, 1984) を改変して引用。

弥生系



- 2017年に、篠田/神澤/角田/安達が論文を発表
- 九州・長崎県・下本山岩陰遺跡の縄文人体形の人骨2体のDNAの解析
 - 弥生時代の古代人のDNAを初めて解析に成功
 - 予想と異なり、縄文人のDNAの外に、**弥生人のDNAが検出**
 - Mt-DNAも、縄文人/弥生人の双方由来
- 弥生人由来のDNAが混じっていたことを、新情報として、論文報告
- 「弥生人」DNAとしては取り扱い注意のコメントを入れた。

図：論文「下本山岩陰遺跡出土の縄文時代前期・弥生時代人骨」より
顔写真4点：土井ガ浜遺跡人類学
ミュージアム発行の冊子「土井ガ浜
遺跡と弥生人」より借用

「日本人の三重構造モデル」は、明確な誤り (2024年の土井ガ浜論文「弥生時代人の古代ゲノムから渡来人のルーツを探る」)

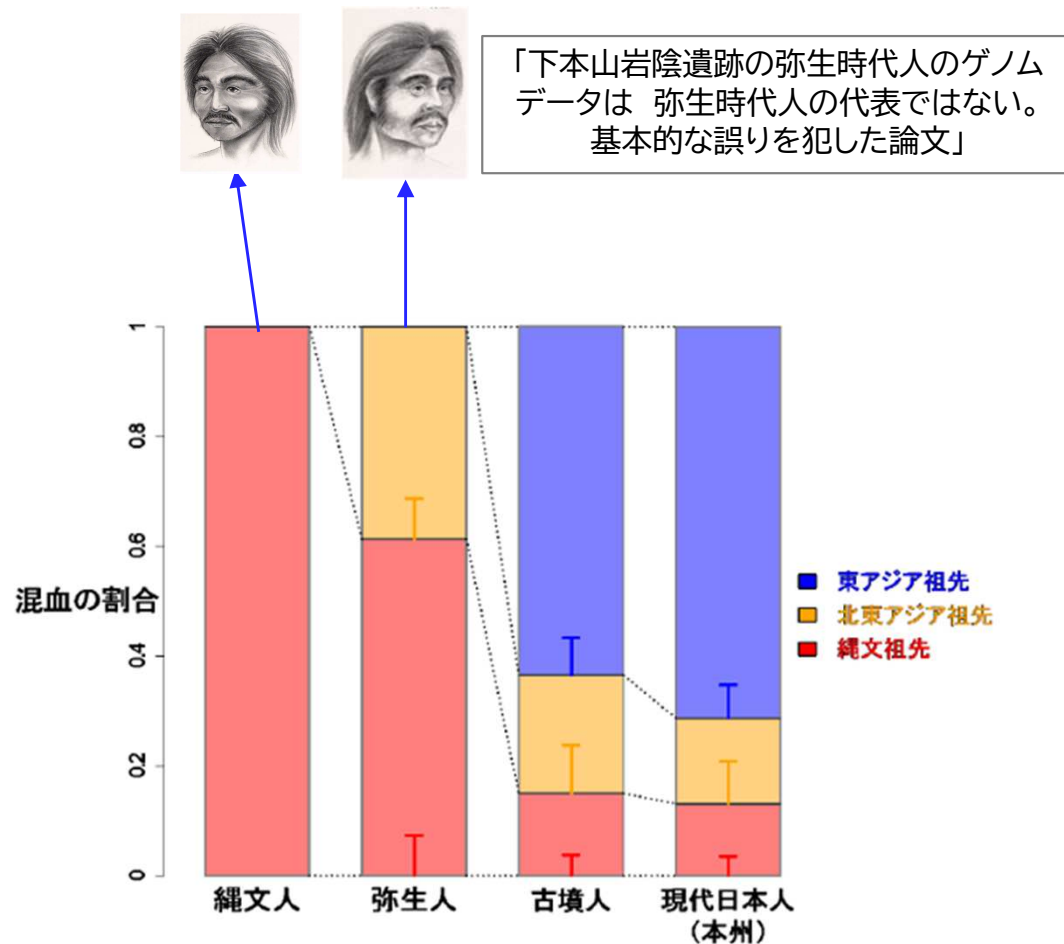
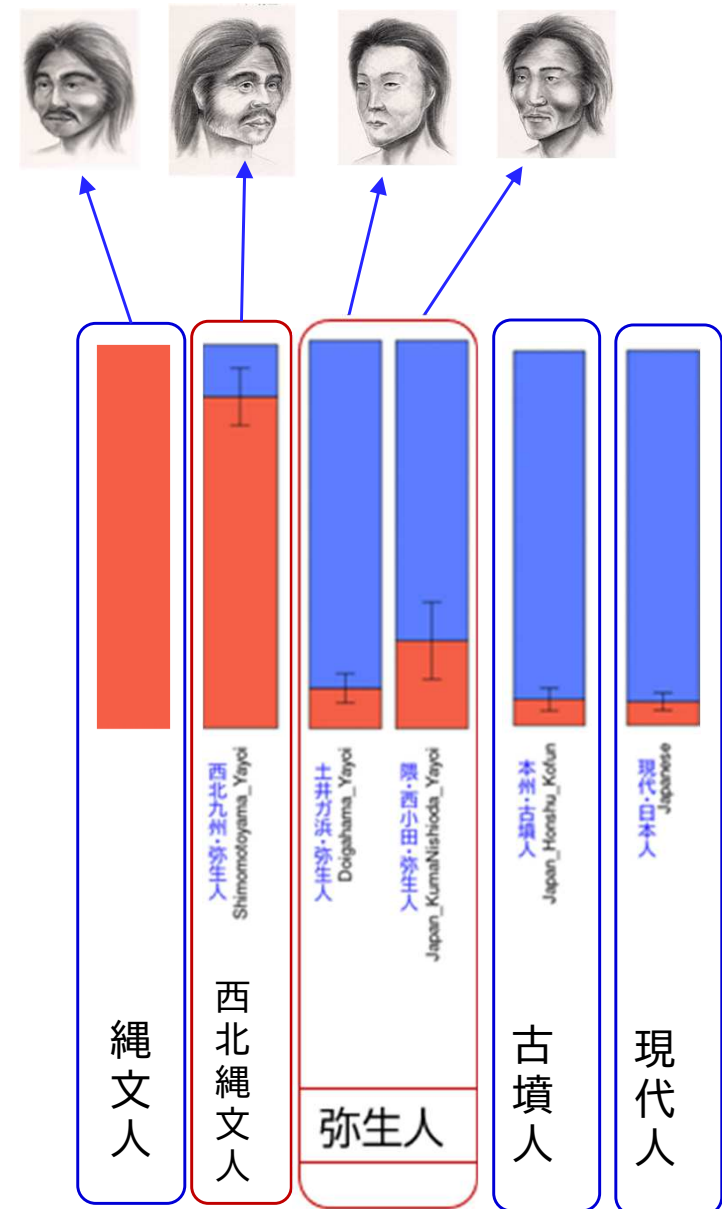


図 3. 縄文時代から現代に至るまでの日本人ゲノムの変遷 縄文人は独自の祖先成分をも

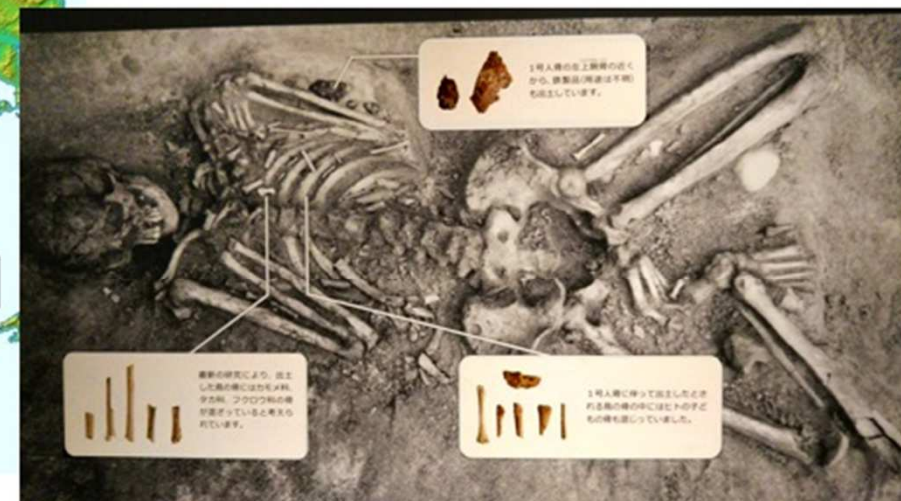
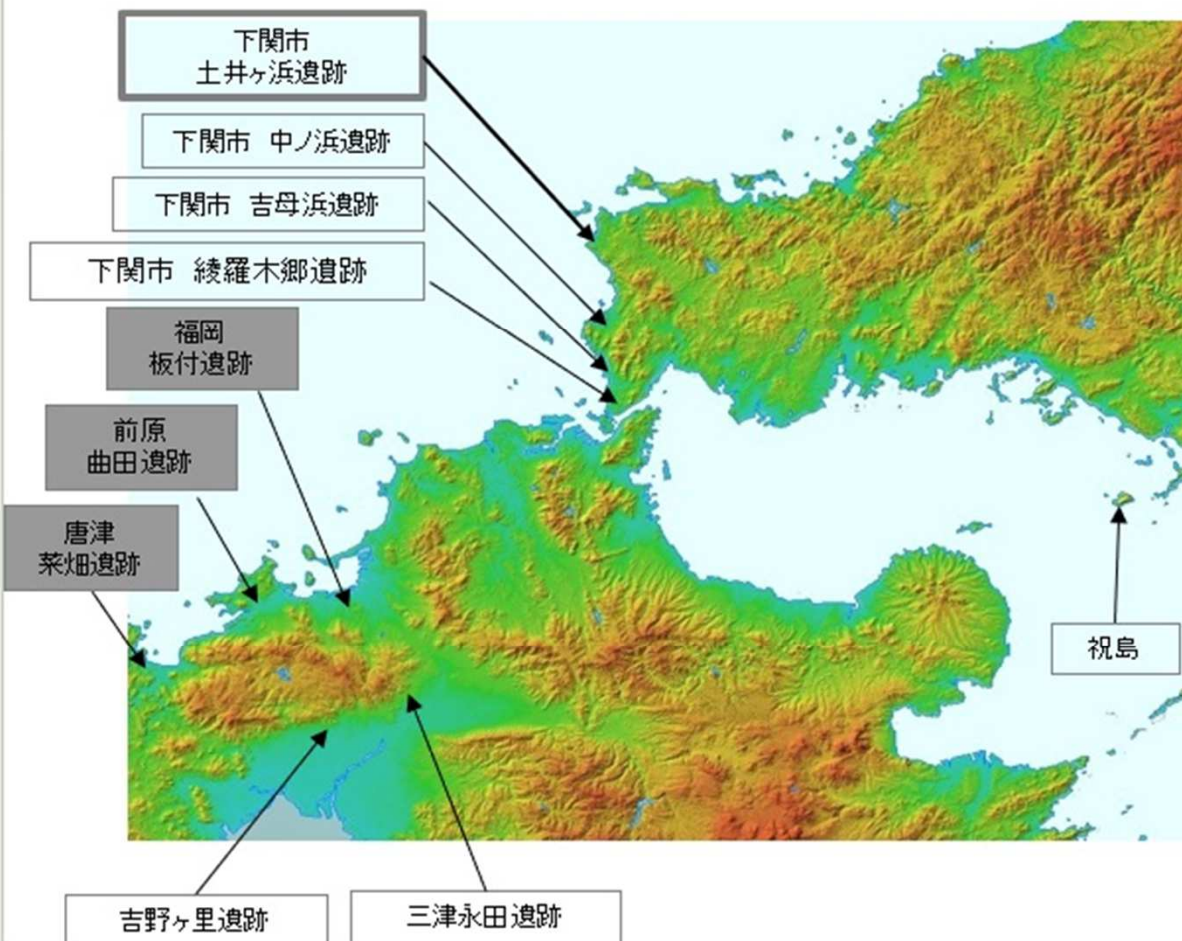
2021年 覚張隆史氏外
「日本人の三重構造モデル」

ヤポネシアゲノム・プロジェクトは上記を全面採用



2024年 土井ガ浜DNA論文

土井ヶ浜遺跡について



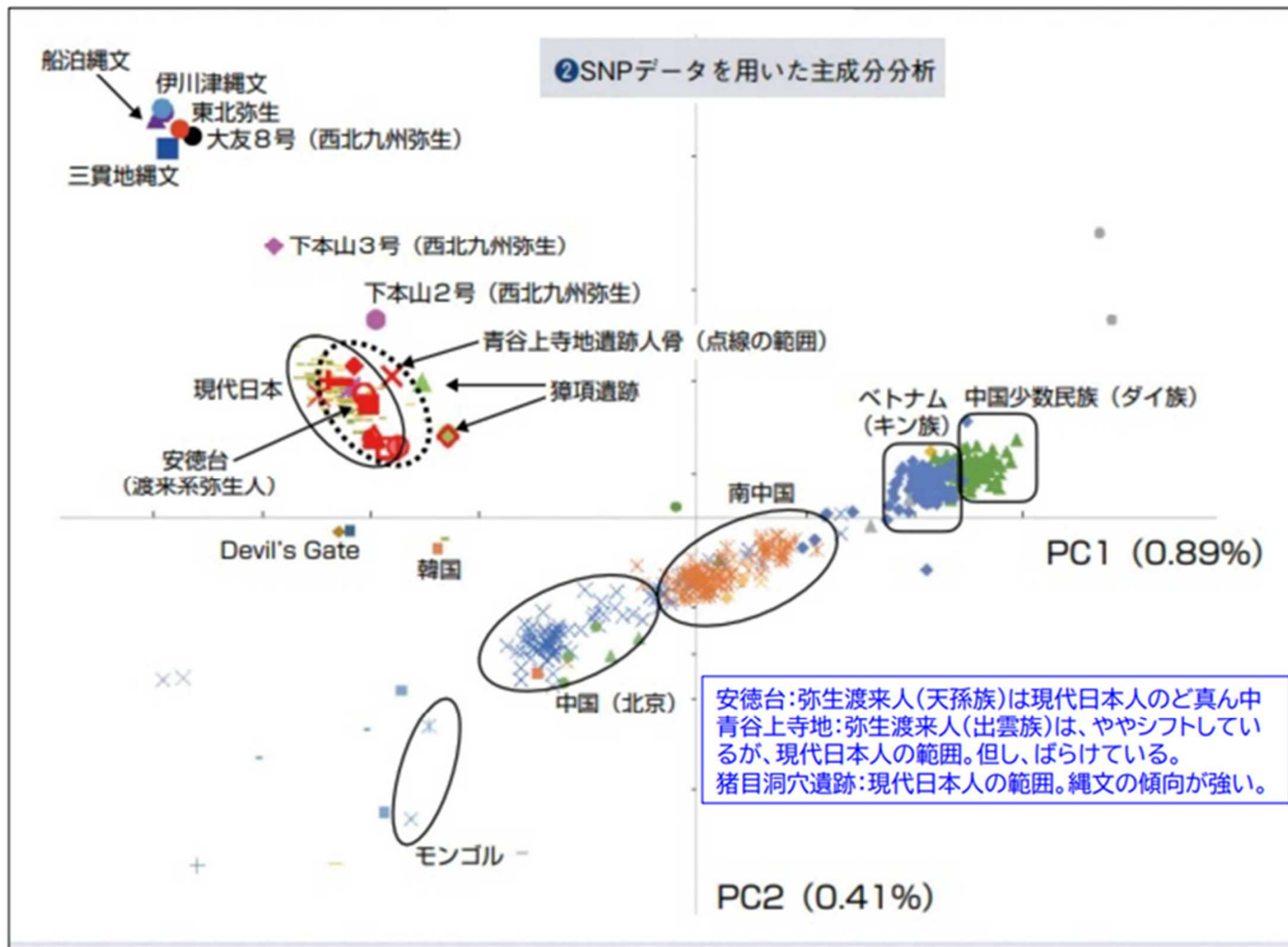
2024年の土井ガ浜論文「弥生時代人の古代ゲノムから渡来人のルーツを探る」

- タイトル Journal of Human Genetics に記載 2024年10月15発行
 - Genetic analysis of a Yayoi individual from the Doigahama site provides insights into the origins of immigrants to the Japanese Archipelago
 - 土井ヶ浜遺跡から出土した弥生人個体の遺伝子解析は、日本列島への移民の起源に関する知見をもたらす。
 - 東邦大学 水野文月講師 東京大学 大橋順教授 外
- 論文内容、「土井ヶ浜遺跡の弥生人の遺伝子解析」により、
 1. 下本山岩陰遺跡の弥生時代人のゲノムデータは弥生時代人の代表ではない。
 - 土井ヶ浜出土の弥生人のゲノムデータは弥生時代人の代表
 2. 弥生時代に、朝鮮半島から来た渡来人が縄文人と混血し、現代日本人の祖先集団が誕生
- 論評
 1. 「下本山岩陰遺跡の弥生時代人のゲノムデータは弥生時代人の代表ではない。」
 - 土井ガ浜人骨のDNAを解析して、隈・小田西人骨の結果を重ね、こちらが弥生DNAで、下本山岩陰人DNAは弥生人DNAを代表させるべきでないことを発表。
 - ◆ 高く評価：
 - 下本山岩陰人DNA解析発表時の論文中に代表させてはいけないことを明記
 - 2021年9月：金沢大学覚張隆史氏などが、上記下本山岩陰遺跡出土の人骨のDNAを弥生人を代表するDNAと扱い、古墳人DNA、縄文人DNAの合わせて、「日本人の三重構造モデル」として提唱した。
 - ヤポネシアゲノムのプロジェクトで上記を喧伝し、「日本人の三重構造モデル」を拡散
 - 2024年、理研グループが発表した「古代ゲノム解析により日本人集団の三分化起源が明らかに」上記を前提に、別な解析方法で「3系統説」の論文を提起
 2. 「弥生時代に、朝鮮半島から来た渡来人が縄文人と混血し、現代日本人の祖先集団が誕生」
 - 「その結果、東アジア系集団に特徴的なゲノム成分と、北東アジア系集団に特徴的なゲノム成分をあわせもつ集団が、弥生時代に朝鮮半島から日本列島に渡り、縄文人と混血して現代日本人の祖先集団となったことが明らかになりました。」と発表。
 - ◆ 否定的評価：
 - 「朝鮮半島から日本列島に渡り」と、記述しているが、時間列を無視した結論
 - 科学的論文ならば、時間列を正しく取り扱ってほしい。古代史・起源論に混乱をもたらす。

三重構造説は否定されたが、

- 2021年 覚張隆史氏外「日本人の三重構造モデル」は、対象サンプルを誤って把握したために発生した基本的なミスに由来する。
 - 三重構造説に準拠した説は、排除されるべきもの。
- **問題となった下本山遺跡出土の人骨のDNA解析結果は、継続して、DNAの大問題。**
 - 今までの認識
 - 縄文人は、縄文人のDNAを持っている。
 - 一般的な弥生人は、渡来した弥生人と縄文人の混血
 - 下元山遺跡出土人骨の問題
 - 縄文人と思われていた九州在住の縄文人の中に、弥生人のDNAが入っていた。
 - 弥生時代よりも前に、弥生人が日本に来ていたことになる。
 - これは、従来の日本古代史のどの説でもカバーできない事実
 - 韓半島南部の釜山特別市加徳島獐項遺跡の、6300年前の人骨のDNA解析結果
 - 縄文人と弥生人の混血と判断される。(現代日本人と類似)
 - 下本山遺跡の人骨と同じように、従来の古代史・日本人起源論では解消できない事実。

下元山遺跡出土の人骨の位置付け



- 2021年(令和3年)9月18日(土)
- 享月
- 日
- 薬行
- 1571
- 第3種郵便物認可
- 現代日本人の成り立ち
- | 従来の説 | 今回の研究 |
|--------------------|--|
| 縄文人
+ 混血
弥生人 | 縄文人 ← 日本列島に土着
+ 混血
弥生人 ← 北東アジア集団
+ 混血
古墳人 ← 東アジア集団 |
| ↓ | ↓ |
| 現代日本人 | 現代日本人 |
- 北東アジア
東アジア

現代日本人の形成は、古墳時代?

遺伝的な特徴がほぼ同じ
- 現代日本人の祖先
古墳時代に誕生?
- 金沢市で見つかった約1500年前の古墳時代の人の骨のDNA解析から、縄文人や弥生人にはなく、現代日本人に見られる東アジア人特有の遺伝的な特徴が見つかった。日本人のルーツは、土着の縄文人と大陸から渡来した弥生人の混血説が有力だが、さらに大陸からの渡来が進んだ古墳時代になって古墳人が登場したことで、現代につながる祖先集団が初めて誕生したことを示唆している。
- 遺伝的特徴、ほぼ一致
- 金沢大や鳥取大などの国際研究チームが18日、米科学誌サイエンス・アドバンスに発表する。研究チームは、約9千年前の縄文人や約1500年前の古墳人など計12体のDNAを解析。すでに解説済みの弥生人2体のデータなどと比較した。親から子に遺伝情報が受け継がれる際に生じるわずかな違いの痕跡から、どの集団が遺伝的に近いのかを調べた。
- その結果、弥生人は、中国東北部の遼河流域など北東アジアで多く見られる遺伝的な特徴を持ち、縄文人と混血していることも確認できた。一方、古墳人は、弥生人が持っていない東アジア人に多く見られる特徴を持っていた。さらに、現代日本人と遺伝的な特徴がほぼ一致することも判明した。大陸からの渡来人の大規模な移住は、約3千年前の弥生時代にさかのぼる。研究チームは、それ以降も漢民族などの集団が次々に渡来し、織物や土木などの新技術を伝えて古墳時代を築き、現代の日本人につながっていったとみている。
-
- 古墳人の女性の復顔像。群馬県渋川市の金井東裏遺跡で出土した骨から復元された1群馬県立歴史博物館提供
- 古墳時代は3世紀後半〜7世紀にかけて続き、弥生時代末ごろには邪馬台国が栄えたとされる。研究チームの金沢大古代文明・文化資源学研究所センターの寛政隆史助教(考古学)は「日本人が縄文、弥生、古墳の3つの祖先集団からなることを示す初めての証拠。ほかの古墳人や弥生人のゲノムを調べることで日本人の起源の謎に迫ってきたい」と話している。(石倉敬也)
-
- 分析した古墳人の頭蓋骨(すがいこつ)。金沢市の岩出横穴墓から出土した11金沢市埋蔵文化財センター提供
- ルーツに新説 金沢大・鳥取大など研究チーム

2. 沖縄の旧人は死に絶えた論(高宮廣衛/高宮広土の唱えた理論)

- 宮古島市史など公式に採用されている歴史: 現在有力な歴史は、
 - 発掘された人骨の示す旧石器時代の人、絶滅し、
 - 縄文時代に九州から本土人が移住し
 - 有史時代になって、農耕を持った弥生人が九州から移住し、
 - 人も文化も本土から渡って来たことになっている。
 - 旧石器人の絶滅は、港川人の骨に残されたハリス線が証拠で、沖縄の島は、生存が難しいことを示しているとした。
- 沖縄の歴史は、
 - 鹿児島大学・高宮広土教授の下記の趣旨をベースとしている。
 - ハリス線 : 湊川人の骨には、複数の飢餓を経験した痕が残っている。
 - このハリス線は、沖縄諸島では食料が欠乏する時期が発生し、人が生き続けることは困難だったことを示す。
 - 従って、彼らは、現在の沖縄人の祖先ではない可能性が高い。



港川人1号レントゲン写真



【写真: 港川人1号(全身骨格)】

圧倒的に認められて来た説

- 沖縄国際大学と沖縄大学の学長を歴任した高宮廣衛氏とその子の鹿児島大学教授高宮広土氏が積極的に唱えてきた説で、「旧石器文化人が島嶼環境に適応できずに島を去るか絶滅した」との説が、沖縄の歴史では常識であった。
- 沖縄の古代人骨に残る旧石器人は滅亡したとの説は、手元などに残る下記の2件書籍等から、いかに圧倒的な説で、反論が認められなかったことが判る。
- 2010年発行の月刊考古学ジャーナルは、特集「南西諸島の考古学」で、高宮広土氏が総論：南西諸島の先史学を記す。7件の論文が記載されたが、その全ては高宮氏が論者・テーマを選定したもの。
 - その内の1論文は伊藤慎一氏の「ヒトはいつどのように琉球列島に定着したのか？」で「滅亡論」を否定する論文。この論文に対して、高宮氏は総論で、「旧石器時代の人々が現代の琉球列島の人々の直接の祖先であったとすれば、世界的に大変珍しい情報を提供するものと思われる。」とあざ笑うかのコメントを記した。
- 2011年発行民博通信 NO133 『日本列島への先史人類の移動と拡散共同研究文』 印東道子著が有る。
 - 「琉球諸島内で、在来の旧石器文化人とあとからやってきた新石器文化人とが出会った可能性については、研究者の意見は一致していない。高宮は、旧石器文化人が島嶼環境に適応できずに島を去るか絶滅したため、このような出会いはなかったと考える。」 ---- 旧石器人絶滅が前提となっている。
 - 海部陽介(国立科学博物館)は、コンピュータを使って(港川人骨の)仮想復元を行った結果を紹介した。
 - 1)港川人と本土の縄文人はあまり似ていない。旧石器文化人と縄文人との連続性は、少なくとも沖縄では認められない。
 - 2)港川人と形態特徴がもっとも近い現代人集団は、アジア人ではなくオーストラリア・ニューギニアの人である。
 - 「共同研究文」で旧石器人、絶滅のシナリオを示したのは、下記
 - 海部陽介「後期更新世のアジアにおける人の移動誌：港川人の再検討を中心に」
 - 高宮広土「南島中部圏へのヒトの拡散と適応過程」
 - 米田穰・中川良平「琉球諸島へのヒトの拡散：『最後の陸橋』はあったのか？」
 - 石田肇「琉球諸島のヒト——過去から現代まで」
- 絶滅の時期は、1万4千年前～7千年前。この時期を空白の期間と呼んで問題視していた。

• 日本語と琉球語の分離時期 従来の学説

- 琉球語(琉球方言)と日本語(本土方言)が分かれた時期は、紀元前後以降、奈良時代以前と考えられている。
 - 言語学者の服部四郎は、二言語間の共通の語彙を比較する言語年代学の手法を使って、京都方言と首里方言の分岐年代について1,450～1,700余年前という計算結果を示している。
 - 安本美典氏は、基礎語彙200単語をリストし、比較。日本語と沖縄首里方言では128語が一致する。これは1750年前ごろに分かれたことになるとしている。
- フランス国立科学研究センター、言語学 研究センターのトーマス パラール氏(主な研究分野は、琉球の言語と日本語の記述言語的歴史的言語学)が、2012 年2 月19・20 日 京都大学で「日琉祖語の分岐年代」を発表。
 - 音韻・文法・漢語の借用などを評価し、上代日本語にも残存しない日琉祖語の特徴が有ることを指摘。
 - 「上代語に残影さえない音韻対立を考慮にいれると、日琉祖語の分岐時代が「8 世紀以前」、つまり日本の有史以前」と記す。

第2章 「分岐的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」 五十嵐陽介著

- 3.2. マトリョーシカ分布として作られた下記の図を作成した。
 - この図からは、宮古・沖縄本島が中心地で、そこから言語が広がったことを示している。

S1 線, S2 線 ... S5 線と呼ぶことにする (図 9)。

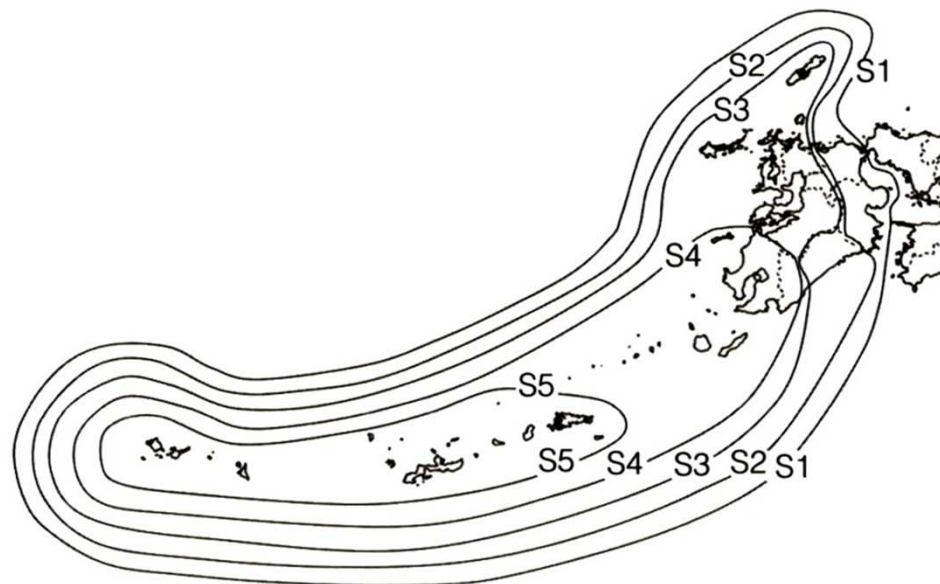
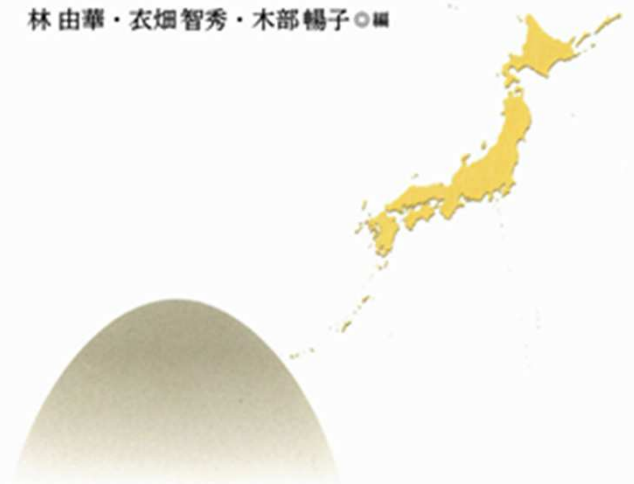


図9：南日本のマトリョーシカ分布

- しかし、本文では、この言語は北九州から、南九州を経て、沖縄本島・宮古島へ分布したと記載。図からは理解できない結論を示す。
- 沖縄の旧人は死に絶えた論の悪影響と考えられる。

フィールドと文献からみる 日琉諸語の系統と歴史

林 由華・衣畑智秀・木部暢子◎編



開拓社

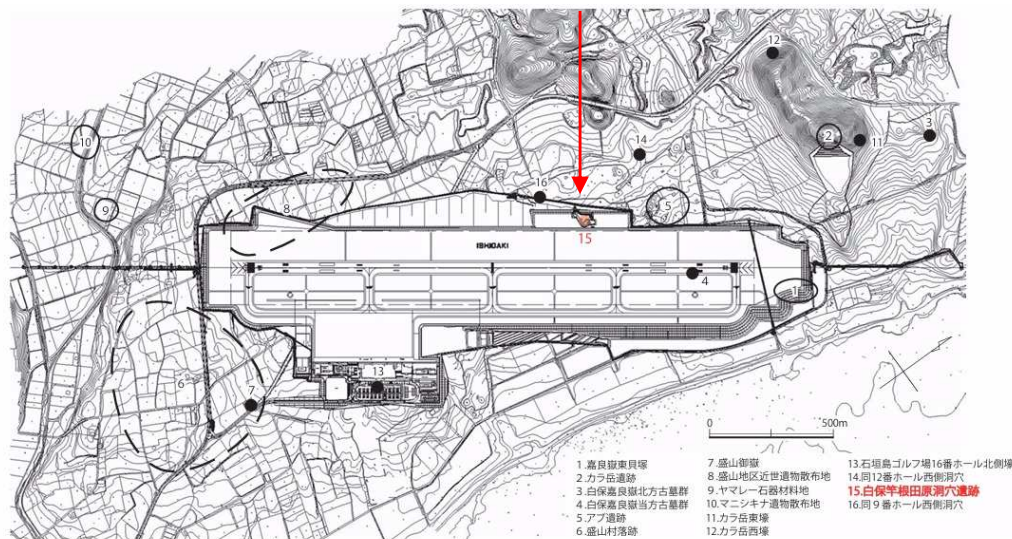
- 消失した要因を次の2件の情報からと推測する。
 1. 白保竿根田原洞穴遺跡の発掘成果(2007～2016年)
 - ✓ 2万7千年前から300年前まで使われた洞穴墓地遺跡
 - ✓ 出土物は、2万7千年前人骨、1100点の人骨破片(20体分)、9000前の土器、石器など
 - ✓ 遺物・人骨が地層に伴い発掘され、地層・年代との相関関係が取れ、年代を越えた連続性が確認された
 2. 港川人のmtDNAが解析されハプロタイプMと判定された(2021年)
 - ✓ この解釈が二分され、朝日新聞と読売新聞の記事は反対の記事が書かれた。
 - ✓ 英文の発表論文には、mtDNAのネットワーク型の発生系統図が示されており、港川人のmtDNAの発展形には、加曾利遺跡人、東名遺跡人、熊本・轟遺跡人などものがあり、縄文人のmtDNAの祖先系であることは明白。
- この消滅に気が付いた2025年には、グーグル検索では、「旧人は死に絶えた論」に関連する記事が検索できなくなっていた。
 - 「旧人は死に絶えた論」は、検索できなくなったとしても、その強い影響下で、歪んだ論旨を持つ著書・論文が残っており、要注意。
 - 確認はできていないが、沖縄の県・市町村の歴史書は、書き替えられた又は消去されたように思える。
 - 以前は、沖縄県の歴史をネットで探すと、旧人は死に絶えた論で作られた、本土から人が移住したと記した歴史文・記事が直ぐに見られたが、現在は、探せない。

白保竿根田原洞穴遺跡

- しらほ さおね たばる どうけつ いせき



2万7千年前の人骨

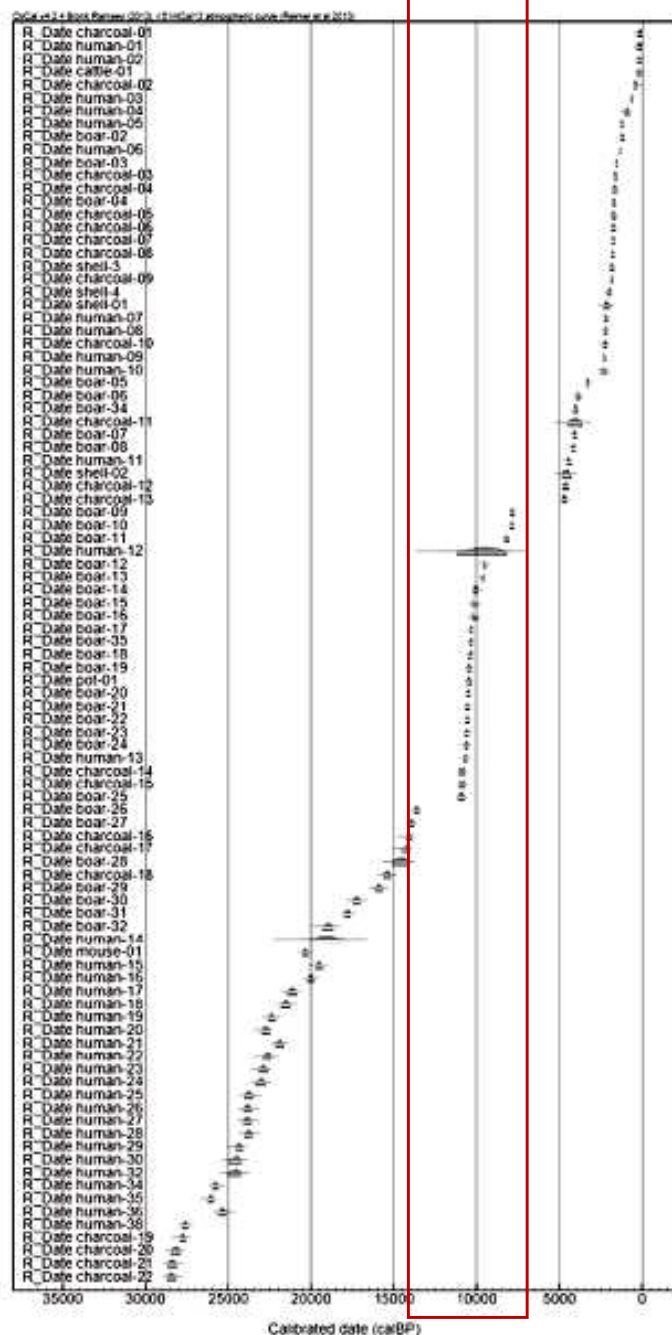


第3図 新石垣空港平面図と周辺の遺跡分布図



沖縄列島の人類遺跡の連続と断絶の時期

第3章 調査の方法と成果



第50図 白保竿根田原洞穴遺跡において測定された較正放射性炭素年代の分布

- 白保竿根田原洞穴遺跡(石垣島:先島諸島)の発掘成果が発表され、旧石器人の生存断絶により発生した遺跡・出土物の断絶した時代について、報告されている。
 - 佐藤宏之(東大)の記事「白保竿根田原洞穴遺跡の考古学的成果」では、1.3～1.1万年前と8～5千年前の2つの期間で遺跡資料に断絶があるとしている。(較正年代)
 - 沖縄県立埋蔵文化センター調査報告書 第85集(2017年)では、
 - 左記の表を示し、7,000～8,000年前にデータの欠損が見られるとしている。
 - 28,000 年前から13,000 年前までの15,000年間については43 点の確率分布が連続して存在しているように見えるので、島嶼環境で連続的に(安定的に)ヒトが生存できたと想像したくなるが、年代データは平均350 年に1 つしか存在せず、遺跡利用の連続・断続については容易に結論を出せない。
- 沖縄では化石人骨が8ヶ所で出土していたが、人骨だけが出土し、その人骨に関わる地層・文化層や石器との関わり合いが確認できなかった。
 - 白保竿根田原洞穴遺跡は墓地の遺跡で、埋葬した地層との関係が明確で、同一層から出土した遺物も多数あり、文化層との関連付けが可能で、従来の化石人骨の出土環境とは異なる。
- 左図のような年代・期間の連続性が確認でき、人骨と地層との確認ができるため、「沖縄の旧石器人が死に絶えた」とする論が成立する余地が無くなった。

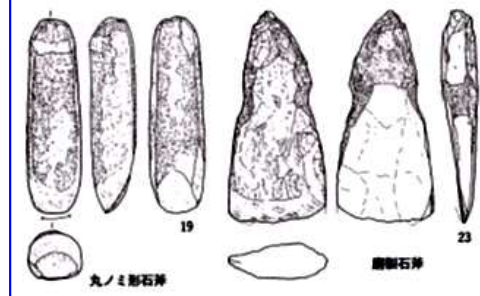
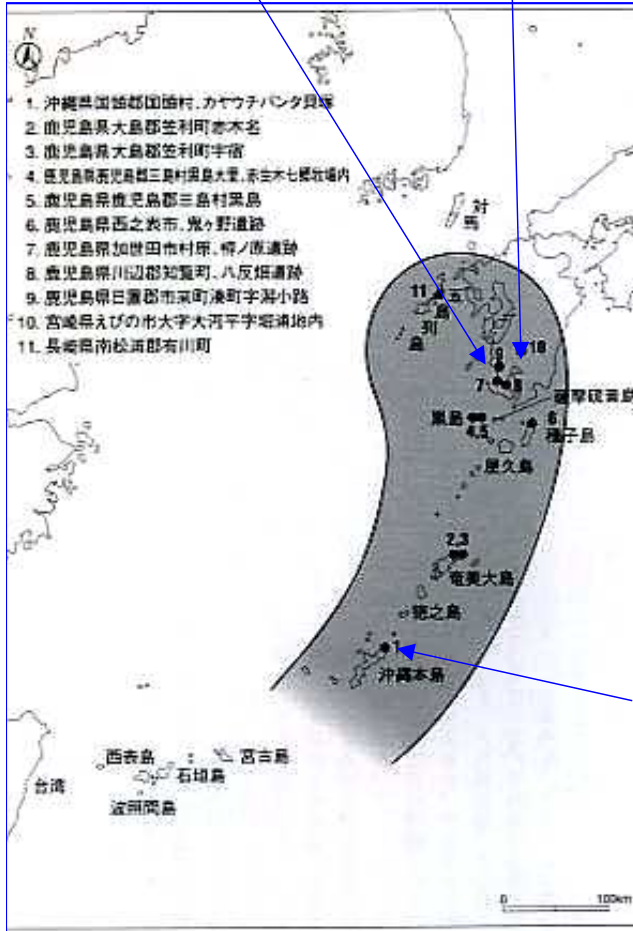
空白の期間: 1万4千年～7千年

「沖縄から九州へ」の証拠 杵ノ原遺跡(14,000～12,000年前)・上野原遺跡(9,500～6,500年前)

24

杵ノ原遺跡

上野原遺跡



もう一つの縄文文化 実は貝文文化 縄文草創期(14000～)

- ・ 食生活が変わり、土器を使用し、定住が始まった時代。東北の縄文と異なり、土器に貝の文様が入る。
- ・ 横型の石斧と縦型丸ノミ型石斧が出土。

- ✓ 大木を伐採し、丸木舟を建造した民族。
- ✓ 沖縄本島から九州西南部へ広がる。

- ・ 杵ノ原が火砕流に埋まった後は、丸ノミ型石斧は、太平洋沿岸の静岡方面まで拡大。



小田静夫氏の論文より借用

上野原遺跡 (9500～6500年前)

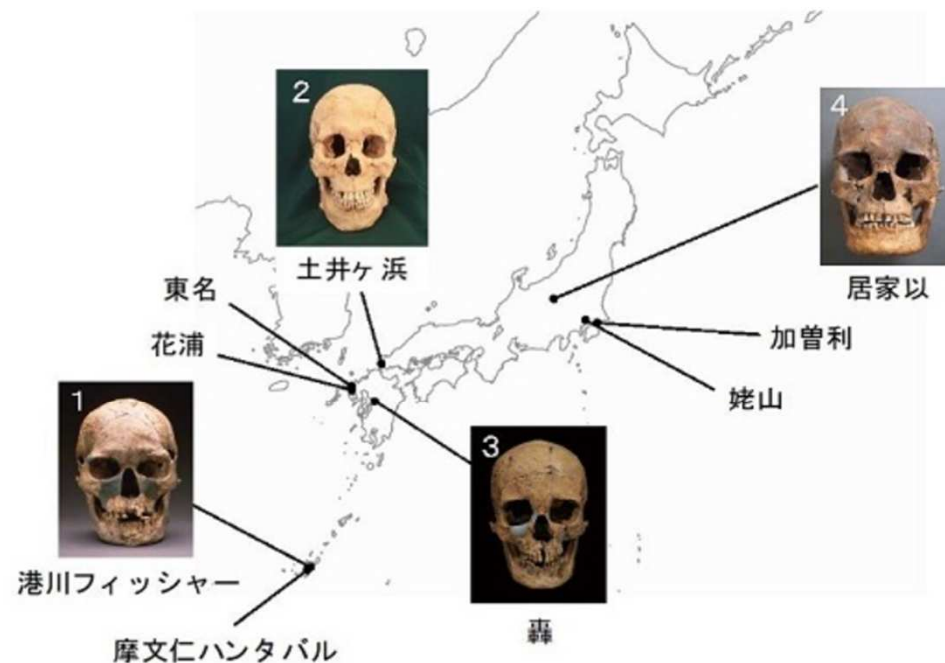
- ・ 日本列島最古の集落跡。石蒸し料理施設の集石39基、[燻製料理施設の連穴土抗\(炉穴\)](#)19基、道跡(二筋)、多数の土抗や生活跡。
- ・ 同じ遺物包含層から曽畑式土器・深浦式土器(前期), 並木式土器(中期), 指宿式土器・市来式土器(後期), 上加世田式土器・入佐式土器・黒川式土器・刻目突帯文土器(晩期)等が混在して出土している。
- ・ 時代が下がると、→ 石斧は全面研磨の時代となる。先島諸島から沖縄・九州に広がり、更に日本海沿岸を上り、秋田・青森まで出土する。

2021年港川1号人骨のミトコンドリアDNAの解析で

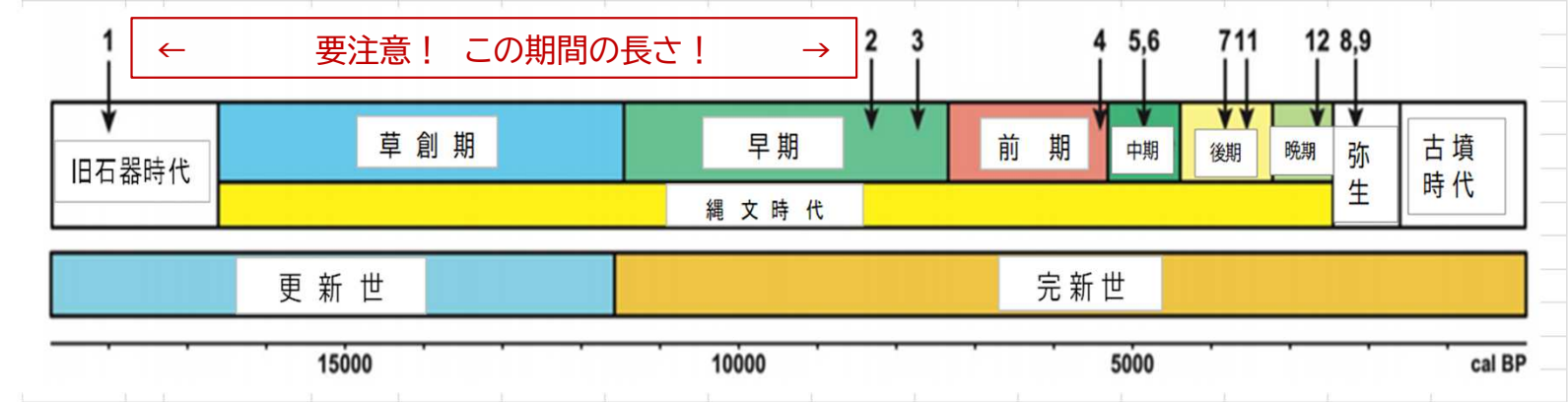
ニュースリリース(東邦大学、総合研究大学院大学)

- 東邦大学、総合研究大学院大学、農業・食品産業技術総合研究機構、国立科学博物館、國學院大學、東京大学、人類学研究機構、京都大学、関西医科大学、杭州師範大学らの研究グループは
- 港川フィッシャー遺跡の港川1号人骨のmtDNAの配列の決定に成功
 - 港川1号人骨は縄文、弥生、現代の集団の直接の祖先ではないが、
 - 港川1号人骨のmtDNAは現代日本列島人集団の祖先のグループに含まれるか非常に近いものだということがわかりました。その結果、日本列島では旧石器時代から現代に至るまでヒト集団に遺伝的に連続性があることが示唆されました。

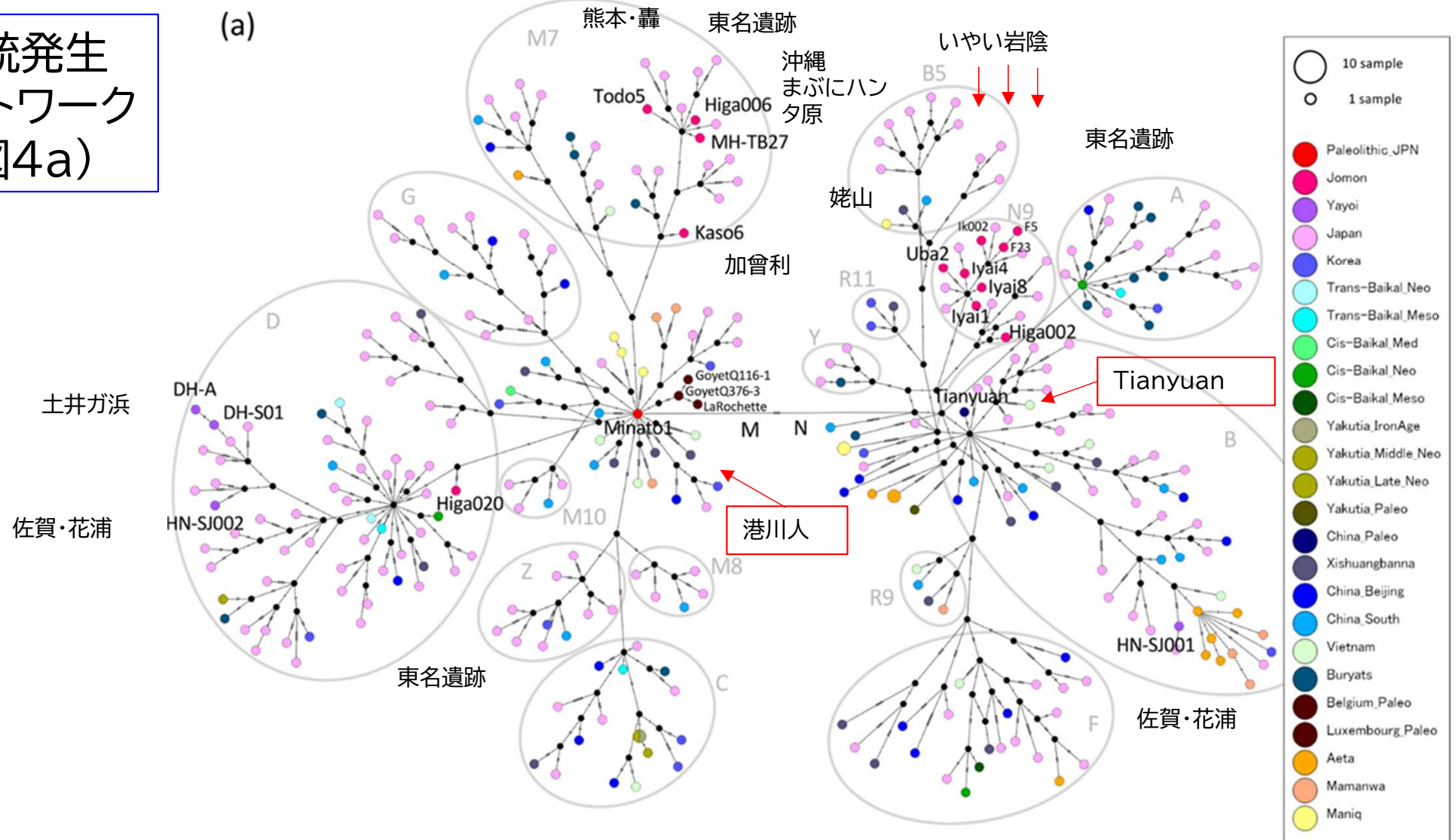
- 英文の発表論文にあるmtDNAのネットワーク型の発生系統図を見ると、港川人のDNAが、系統発生の中心におり、日本人の祖先グループはここから分岐したことが明白。
- この明白さが、「沖縄の旧人は死に絶えた論」を葬った要因と推測する。



1. 港川1号人骨(男性) : 東京大学総合研究博物館所蔵
2. 土井ヶ浜人骨(男性) : 人類学ミュージアム 松下孝幸氏提供
3. 森5号人骨(女性) : 人類学ミュージアム 松下孝幸氏提供
4. 居家以1号人骨(女性) : 國學院大學・谷口康浩氏、東京大学・近藤修氏提供

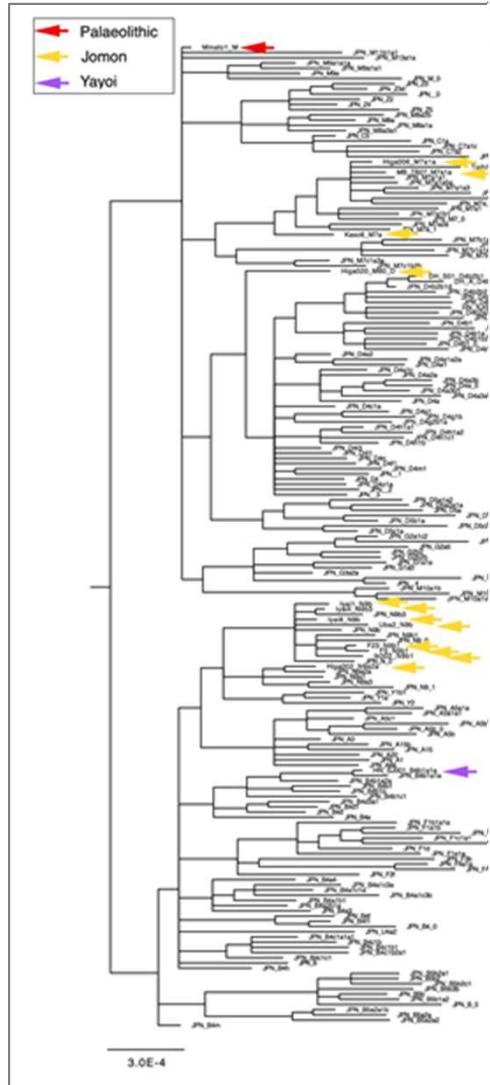
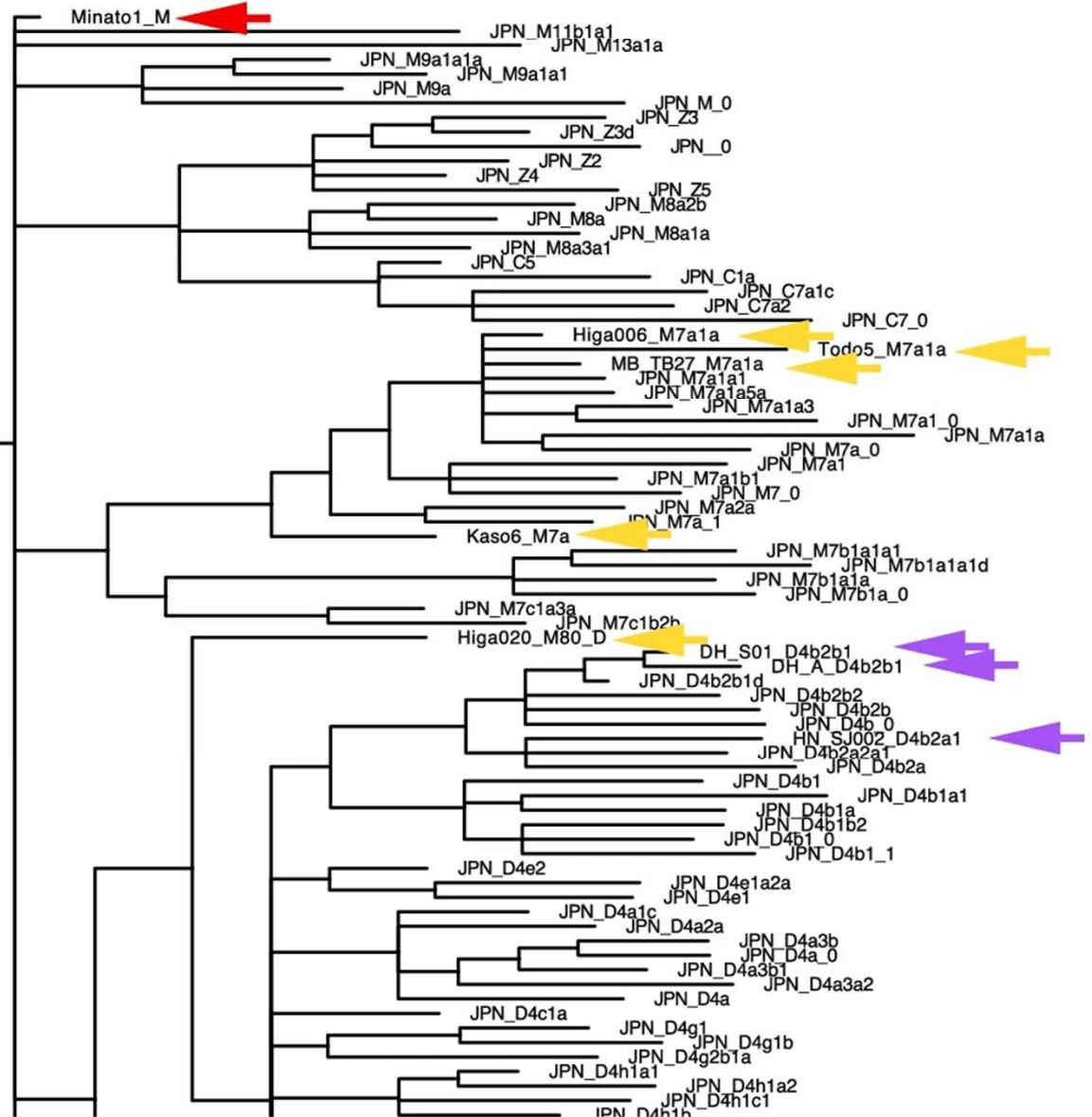
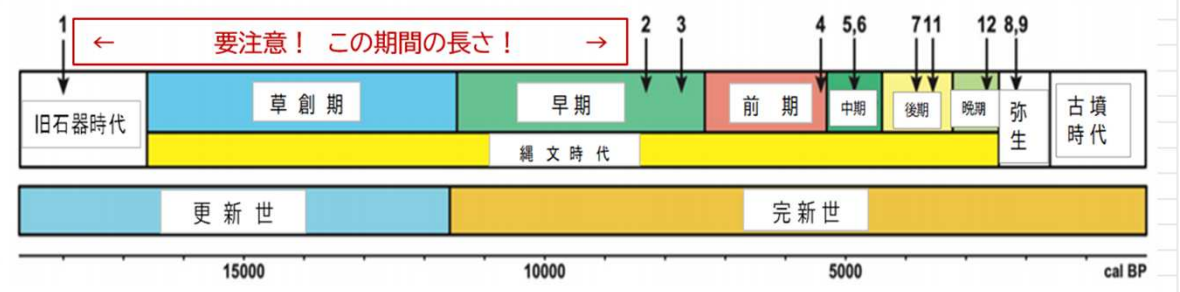


系統発生 ネットワーク (図4a)



沖縄・港川人の mtDNAの 解析

 Palaeolithic
 Jomon
 Yayoi



2021/06/14 14:28

「港川人」、現代日本人と直接つながらず

- 旧石器時代の「港川人」、現代日本人と直接つながらず…DNA分析「ルーツ論争」に一石
- 縄本島で出土した旧石器時代の人骨、港川人(約2万2000年前)がDNA分析の結果、遺伝的に縄文人や現代日本人の直接の祖先ではないことがわかった。
- 東邦大の水野文月助教(古代ゲノム学)は、「港川人と縄文人は共通の祖先から枝分かれし、港川人の方は直系の子孫を残せず途絶えた」とみられる」と分析している。

ご先祖は 2万年前の港川人？

港川人の全身骨格のレプリカ。国立科学博物館提供



港川人の顔の復元図。国立科学博物館提供、山本雄氏作画



港川人は私たちの祖先か？



港川人

1970年、沖縄県八重瀬町のフィッシャーと呼ばれる岩の割れ目から、約2万年前の旧石器時代の男女4人の全身骨格が見つかった。発掘場所の地名から港川人と呼ばれる。小柄で華奢な上半身に対して、頑丈な骨格の足腰やあごを持っていた。平地が少なく起伏の激しい島内を集団で放浪しながら、採集狩猟生活をしていただとみられる。旧石器時代の全身骨格が日本で見つかるのは極めて珍しい。発見者の那覇市の実業家、故・大山盛保さんは、人骨発見の3年前に現地でイノシシの骨を見つけた。それ以来、「追ってきた人間の骨もあるはず」と発掘を続けていたという。

一方、分析した現代の日本人約2千人の中に、港川人1号と同じ遺伝子の特徴を受け継ぐ直系の子孫はいなかった。

一方、分析した現代の日本人約2千人の中に、港川人1号と同じ遺伝子の特徴を受け継ぐ直系の子孫はいなかった。

港川人1号

身長153センチ、成人男性とみられる。頭骨の分析から、こめかみの筋肉が発達し、下あごの骨も頑丈だったことがわかってい

一方、分析した現代の日本人約2千人の中に、港川人1号と同じ遺伝子の特徴を受け継ぐ直系の子孫はいなかった。

一方、分析した現代の日本人約2千人の中に、港川人1号と同じ遺伝子の特徴を受け継ぐ直系の子孫はいなかった。



発掘調査が進む港川フィッシャー遺跡(1968年12月)。港川人の全身骨格は70年、中央の割れ目(フィッシャー)の中から見つかった。馬場悠男さん提供

近く別の洞窟からは、2万3千年前の骨格が見つかった。世界最古の針や、カニの爪、ウナギの骨などが見つかった。国立科学博物館馬場悠男・名誉研究員(人類学)は「日本列島の旧石器時代の集団を比較すれば、その個体や集団の系統をさかのぼれる」とみる。分析の結果、港川人1号は、現代の日本人や縄文人、弥生人と共通して多く見られるタイプの遺伝子を持つことがわかった。港川人の子孫の系統が途切れていることが示唆されている可能性も。一方、分析した現代の日本人約2千人の中に、港川人1号と同じ遺伝子の特徴を受け継ぐ直系の子孫はいなかった。

DNA解析 日本人につながる可能性

沖縄県で約2万年前の全身骨格が見つかった「港川人1号」は、現代の日本人につながる祖先だとも考えられない。そんな可能性がDNA解析からわかった。日本人のルーツは、土着の縄文人と大陸からの渡来人による「混血説」が定説だが、さらに古くさかのぼる可能性が出てきた。



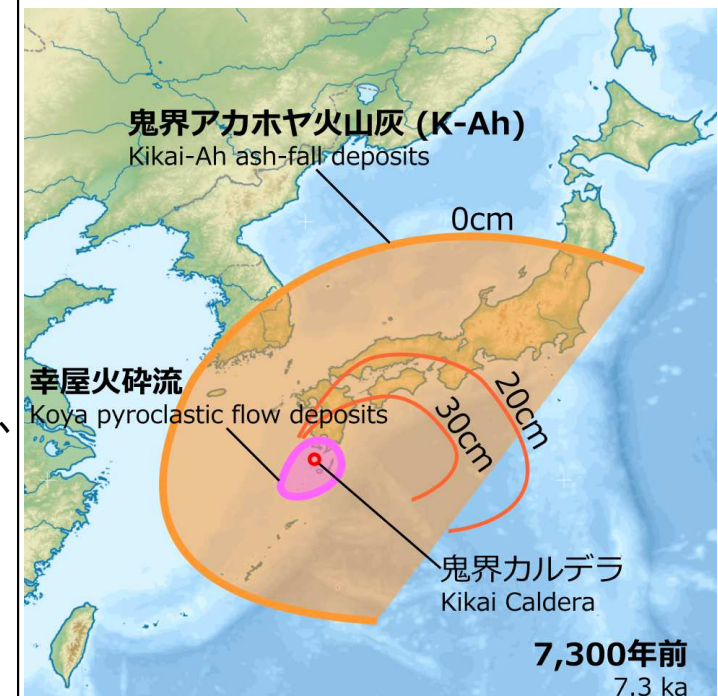
一方、分析した現代の日本人約2千人の中に、港川人1号と同じ遺伝子の特徴を受け継ぐ直系の子孫はいなかった。

一方、分析した現代の日本人約2千人の中に、港川人1号と同じ遺伝子の特徴を受け継ぐ直系の子孫はいなかった。



「鬼界カルデラ」

- 先史時代以前に複数回の超巨大噴火を起こしている。
約7300年前の大規模カルデラ噴火は過去1万年の内では世界最大規模で、火砕流が九州南部にも到達し、九州南部の縄文文化を一時的に壊滅させたと推測されている[3](噴火から数百年～千年程度で縄文文化が再生された)。
- 過去1万年で世界最大の噴火が起きた場所
 - 日本では過去15万年間に少なくとも14回起きたことが知られています。
 - 日本列島の歴史の中で最も規模が大きかったと考えられているのは9万年前に起きた噴火で、九州の中央部に位置する阿蘇カルデラが形成されました。
 - そして最も新しい超巨大噴火が7300年前に鬼界カルデラで起きました。
 - しかも、日本だけでなく世界的に見ても最も新しいカルデラ噴火で、過去1万年で世界最大規模の噴火です。
- あたかも、古代史史上最大の火山噴火の如く記している。
3万年前の火山噴火に一切触れない記述は、古代史関係者の誤解を呼んでいる。



始良カルデラ

1. 年代が「3万年前」と明確に記されていることに注意

- 少し前の旧石器の書物を見ると、AT(始良丹沢火山灰)と呼ばれ、2万5千年前頃と記されていました。それが、正確に3万年前と判明したので、年代が変更されていることに、ご注意ください。
- (水月湖の年縞を調べて、 30078 ± 48 年とカウントされ、年代が確定しました。)

2. 始良カルデラなどの噴火による被害

- 凡そ4万年前に日本に来た旧石器人が、この時代に生活していたはずです。このころは、九州と四国と本州は(海面が70-80m低い)陸続きで、暮らし良い処だったと想像します。突然、始良カルデラの大爆発で、今の九州の地域の人は全滅し、今の四国・中国の人々もダメージを受け、近畿地方も35センチメートルの火山灰で、生活環境は悪化した筈です。何年で樹木が回復し、生物が戻り、人が生活できるようになったのか、気になる処です。
- その後、1万3千年前には、桜島-薩摩テラフの大爆発があり、南九州を火砕物が襲い、壊滅的被害を被りました。

ひ | 教える | 広げる | 探究 |

3万年前 巨大噴火の警告

火砕流が100m以上堆積 本州全域に降灰



始良カルデラの噴火で積もった火砕流の地層＝鹿児島県鹿屋市、いずれも産総研地質調査総合センター提供



始良カルデラの噴火で噴出した火砕流の分布 (ピンク色の部分)

始良カルデラ 産総研が再調査

3万年前に鹿児島・始良カルデラで発生した破局噴火で、噴出した火山灰や火砕流などの量が、従来想定されていたより1.5倍の規模だったことが、産業技術総合研究所の調べで明らかになった。昨夏の福徳岡ノ場や今年1月のトンガ諸島をはるかに超える規模の噴火が、国内でもおよそ1万年に一度のペースで起きている。巨大噴火の実態を明らかにし、防災に役立てようという試みが続く。

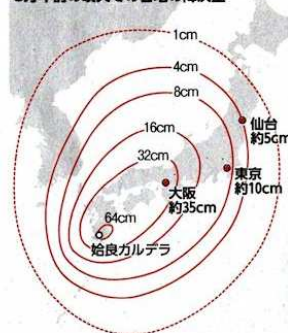


堆積した火砕流は鹿児島市で100m以上に達し大阪で50m、東京でも10mの降灰があった。

産総研が1月、ウェブ上に公開した噴火物の分布図によると、高温の岩石がガスが高速で広がる火砕流は、南九州の平地を埋め尽くし、カルデラから半径100kmの範囲に広がった。堆積した厚さは約40cm、西の九州電力川内原子力発電所周辺でも約10cmになった。

現在の東シナ海や、太平洋側にも厚さ40〜50cmが流れ込んだことがあった。火山灰も鹿児島周辺で64cm以上積もり、九州や中国、近畿地方などで30cmを

3万年前の噴火での各地の降灰量



産業技術総合研究所の資料から



これまで、この噴火の噴出量は約6千億立方メートルと推定されていたが、今回の調査で、噴火規模を0.8で示す火山爆発指数(VI)で上から2番目の7級

と判断された。この破局噴火をもたらし、現在の鹿児島県にある、大量のマグマを噴出して降灰し、始良カルデラを形成。1万数千年前に海水が流れ込んだ。鹿児島市や霧島市などに囲まれた鹿児島湾北部にあたり、今も活発に活動する桜島は陥没後の噴火を繰り返してカルデラ南端にできたものだ。



産総研が過去の巨大噴火の再見直しをする。九州の火砕流や火山灰が堆積した地域は「トラス台地」と呼ばれ、土砂災害や斜面崩壊が多発する。この知られた分布図(https://www.gsi.jp/Map/PJ/17111101)は、土砂災害リスクの参考にもなる。このため、過去12万年間

と考えられてきた。しかし、産総研が2年かけて県内外の地層を調べ直し、シミュレーションも組み合わせて改めて見直したところ、5割近く多い8千億〜9千億立方メートルとなったことがわかった。

富士山の体積は約5千億立方メートルとされ、ほぼ三分一になる。VI8(1兆立方メートル)に迫る規模で、宝田晋治・上野在研究員は「研究が進んで、さらに多くの量が出ていたことが分かる。VI8となる可能性もある」と話す。



2015年に土石流が発生した鹿児島県鹿屋市の現場。火山噴出物が堆積した地域は、大雨による土砂災害のリスクが高い

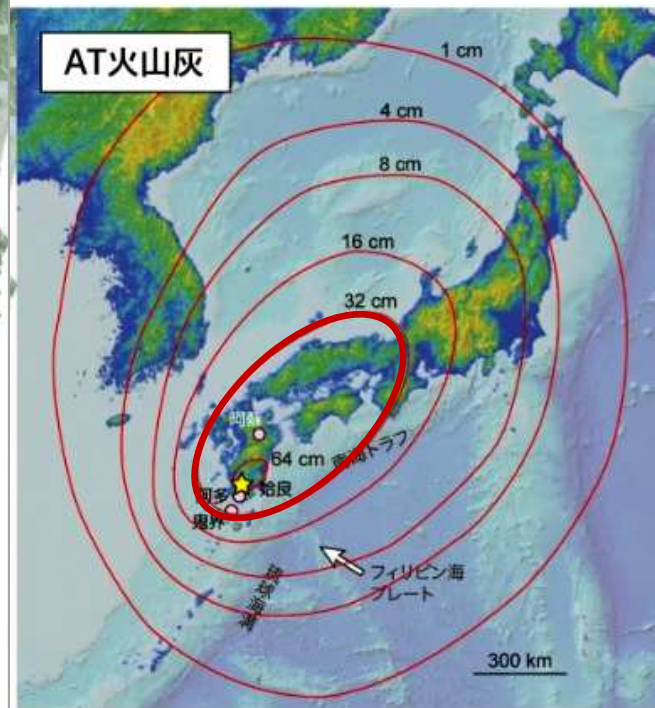
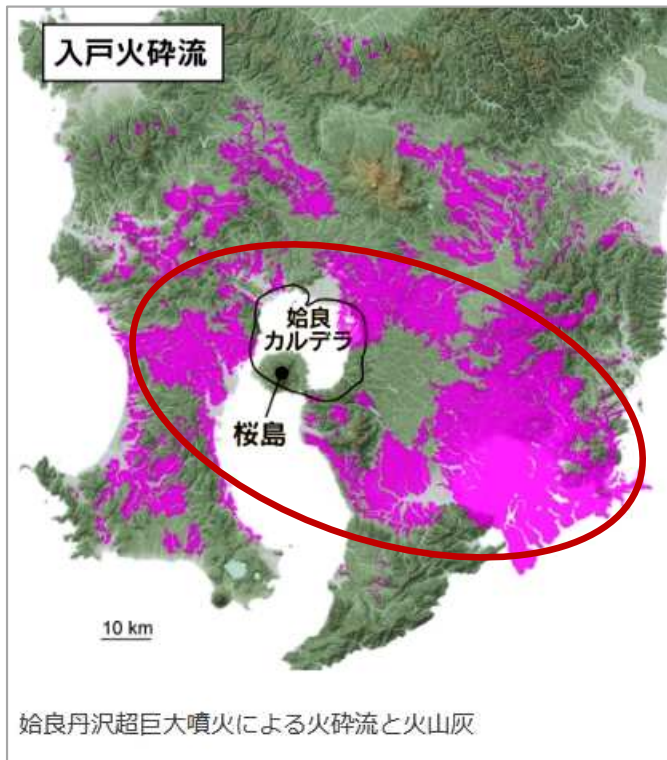


国内で12回あったVI8以上の大規模噴火を再調査し、火砕流の分布図を公開することにした。

8万9千年前の阿蘇カルデラ(VI8)や、7300年前に南九州の縄文文化を壊滅させたといわれる鹿児島沖の縄文カルデラ(同VI)、「箱根東京火砕流」で知られる6万年前の箱根カルデラ(同VI)などの噴火を調べていくという。

下司信夫・大規模噴火研究グループ長は「大規模な火砕流は一つの県を覆うくらい大きい。実際に起きた場合の分布を知ることで、防災対策をたてるきっかけになれば」と語る。

鬼界カルデラ爆発と始良カルデラ爆発



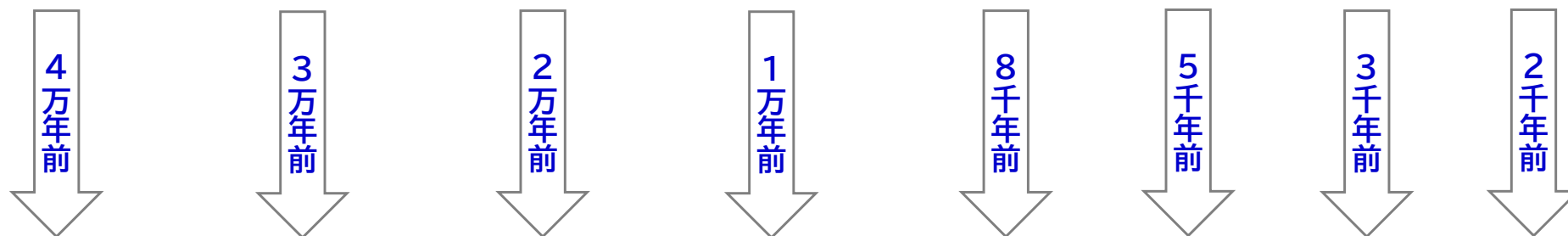
- 鬼界カルデラ爆発の被害の大きさを過大に評価していないだろうか？
 - 3万年前の始良カルデラ爆発の被害の規模は、忘れてはならない。
- 火砕流・火山灰の噴出量は、
 - 始良カルデラ：345 (DRE km³:マグマの堆積で換算)
 - 鬼界カルデラ：84 (同上)
- 鬼界カルデラ噴火中心位置と上野原遺跡では100km離れているので噴石はまず飛んでこないし、250mもの高台なので、海を渡るという火砕流も、津波も届かないはずである。灰が降り積もっても犠牲者は普通出ない。
- 大隅半島の梶ノ原遺跡は、鬼界カルデラで壊滅的被害を受けたが、上野原遺跡では、集落は存続した。
 - 鬼界カルデラで消滅するほどの被害は、火砕流の襲った大隅半島・薩摩半島部分で鹿児島県の北半分は被害は少ない。
- ◆ 始良カルデラ爆発で人が絶滅した九州へ、人が来て、梶ノ原で住居を作り住み、上野原遺跡でも暮らした人々は、どこから来たのだろうか？ 丸のみ型石斧を開発し、丸木舟を作り、航海できたのは、どこの人々だったのか？ 気になる処。

幸屋火砕流と鬼界アカホヤの広がりが。九州南部・東部、四国、本州瀬戸内海沿い、および和歌山県で20 cm以上あり、広くは朝鮮半島南部や東北地方にも分布する。

沖縄・琉球の古代史の見直し

- 「沖縄の旧石器人の絶滅説」が虚偽と認識され、消滅したことから、沖縄の古代史が見直されることになる。その前に、行うべきことは、日本本土と沖縄の関係を見直すこと。
- まず、4万年前から歴史年代までの、重大な事象を見直す。

注意：年代は、最新科学の成果で、大幅な修正が入っています。



過去

-----日本・九州の重大事件-----

→

現代

旧石器人 沖縄・日本本土に到来

旧石器人 北海道へ 樺太・シベリアへ

始良カルデラ爆発 九州・四国 中国被害

鹿児島県 耳取遺跡 2万4千年前

梅ノ原遺跡 丸のみ型石斧 南方文化集落

一万三千年前 桜島のサツマ火山灰で埋没

九千五百年前 上野原遺跡が形成

七千三百年前 鬼界カルデラ噴火 アカホヤ

焼畑農業 米・ヒエ・アワ・豆
黒河式土器・
甕式土器

沖縄の縄文人・倭人の混血した人が、九州へ移住

西北縄文人(縄文人と弥生人混血)

一次水田稲作 支石墓

一次水田稲作 金属器 甕棺墓 弥生文化

高天原・天孫降臨

出雲国譲り・神武東征・大和政権誕生